



京都支部
2019年度支部活動報告



1. <2019. 04. 13 2019年度支部総会>
2. <2019. 06. 22 2019年度第1回例会>
3. <2019. 09. 14 2019年度第2回例会>
4. <2019. 10. 11 国際奨学生との交流会>
5. <2019. 11. 12 2019年度第3回例会>
6. <2020. 01. 25 2020年新年会>
7. <2020. 02. 22 会員出版祝賀会>
8. <2020. 03. 14 2019年度第4回例会>
9. <2020. 03. 20 国際奨学生送別会>

1. 2019年度支部総会

2019年4月13日

日時 4月13日（土）

会場 ウィングス京都

司会 高橋侑子

出席者 19名

恵まれた天気となった4月13日、1年の総括として支部総会が執り行われました。出席者18名、委任状15通で会は成立。事業報告や会計報告が為されました。そして今年度は役員交代の年。松田支部長から高橋新支部長へとバトンが渡されました。

そして総会の最後には全国総会実行委員会の各担当者が進捗状況報告を行い、京都支部全体で情報の共有をいたしました。

開会の挨拶 松田栄子支部長（要旨）

いよいよ来月には、京都で全国総会を迎えることになりました。その目的に向かって、様々な会員が、それぞれの力を発揮し、協力し合い、また、新入会員を迎え若い力を得て、今日の支部総会を迎えることができました。皆様の底力を感じた一年でした。今年度も力強く皆さまと共に歩んでいきたいと思っております。

高橋侑子新支部長挨拶（要旨）

高齢という事もあり、支部長を引き受けることに多少戸惑いもございました。しかし、他の役員の方々に快くお引き受け頂いたので助けて頂きながら務めて参りたいと思います。今回若い方に沢山入会していただいて、役員もなるべく若い方をお願いを致しました。そこで、諸先輩方には積極的に会にご参加頂いて、遠慮なくご意見やアドバイスを頂くことが私の願いであります。今年度どうぞよろしくお願い致します。

講演「食と免疫、福島は今」

(公財)ルイ・パストゥール医学研究センター
基礎研究部室長、理学博士

1972年、大阪市立大学理学部生物学科卒業。
京都大学理学研究科単位取得退学、理学博士。

1986年、京都パストゥール研究所
(現ルイ・パストゥール医学研究センター) 入職。

性差・女性ライフサイクルの研究、女性研究者支援活動にも取り組む

講師：宇野賀津子氏



活動の紹介

私自身の福島県初コンタクトは2011年。日本学術振興会の産学協力研究事業に関わる説明チーム(大阪大学を中心としたチーム)に参加し赴いた福島県の白河市での住民に向けた放射線の説明会であった。ここでは低線量放射線の生物への影響と食の重要性の話をした。

詳細は福島の線量がチェルノブイリを超える事がないと思った時点で、もしあるとすればガンや老化の促進への影響が考えられる。しかし免疫の研究者として言える事として今からでも影響を軽減する事は出来るという事、ストレスが免疫には一番良くないという事、これからの生き方が大切だという事を主に話した。

後々考えたこのチームの特徴は女性の専門家や医者等多様な人たちでチームを組んだ事。その為か、過激な対応を受ける事もなかった。(他では卵を投げられたところもあったそうだ)

昼間は学校の周りや地域の線量を測りエリア別の線量を出して説明会に臨み、最後には白河市から感謝状も頂く事もできた。

放射線とはなにか

ベクレル—Bq—（放射能）・・・放射能の強さを表す単位。（放射性物質から1秒間に出る線の数。）食品の放射線量の単位。

シーベルト—Sv—（線量）・・・放射線によってどれだけ影響があるかを表す。
（1シーベルト=1000ミリシーベルト）人が受けてどれくらいの影響があるかを表す単位。

放射線は福島だけでなく身近にあるもの。宇宙からや食品から放出されるもの、特にカリウム由来の放射線は多い。そのためどの地域にいてもそれなりに摂取している。自然放射線の年間平均約2.4ミリシーベルトは受けているのだ。

福島現状

○屋内、外の差

→ほとんど差はない。保育園、園庭で計測した所、園庭の真ん中が一番低い。逆に端は雨が降ると端に流れる為高め。

○野菜

→市場に出回っているものは安全。

○家庭菜園

→白菜、キャベツ等も大した線量ではなかった。自宅の野菜が基準値を超えたとしても、土を入れ替え、肥料をカリウムの多いものを選べば食品移行が減る。

○山菜、たけのこ、きのこ

→他の野菜に比べれば少し高めだが、基準値超えはほぼ無い。以前松茸で3000Bq/kgというのがあったが、年に1度、1kgも食べないので、個人で食べるという判断をしても大して健康に影響のない範囲である。

○お米

→全袋検査を継続しているが、4年連続0。そろそろサンプリングによる検査に移行してはどうかという話になっている。

○大気

→2011年秋には震災前のレベルに戻った。各家庭での洗濯物の外干しも土埃に注意すれば可能。

—2012年コープ福島が行った《陰膳方式による放射性物質の測定》—
(2011年秋～2012年春のデータ)

県内100軒の家庭で1人分の食事を2日間分冷凍してセンターに送り調査。

結果→ほぼ野菜由来の放射線。セシウムは10Bq以下。1検体あたりの測定時間は14時間で、それほどわずかな量だという事になる。

日本、福島の土壌

食品への移行という意味での放射能汚染はチェルノブイリに比べて少なかった。それは日本の土（特に福島の土）が粘土質だからだ。粘土とセシウムの結合は大きく、汚染のわりに食品への移行が少なかった。福島で米の生産が出来るのはこの事による。一方チェルノブイリ原発に近いベラルーシの土質はサラサラの砂地だった。

世界の放射線

行く先々で携帯型の計測器で放射線量を測っているが関東より関西が高めだったり、質の良い大理石を使用した建物内は高かったりと、原発の有無は関係なく放射線は計測された。国際線の飛行機に乗ると原発付近に行っただけの線量になる。世界には福島より高い線量の地域は沢山あった。

物理専門家の中には原発等反対する声もあるが、生物医学の観点からは放射線治療で多くの人の命が助かっている。日本で放射線について習うのは広島、長崎の原爆が初めてで、知識がほぼないのも問題。

風評被害

リスクを過剰に伝え恐怖を煽る無責任な行動を目の当たりにした経験がある。今までエイズ教育にも関わってきたが、HIVの子供たちに対して陰性の証明書を持ってこないで登校できないと言う学校があったので、血が一滴付着しても感染する事はない等説明しに行った。

事故以降放射線による発ガンリスクも言われるが、実際日本人の発ガンリスクのベースは30%あり、それに少し加算される程度なのである。

そして福島県外避難が増えた2011年夏以降。原因としてリスクコミュニケーションの失敗が挙げられる。ツイッター解析をしたところ、2011年5月以降リスクを恐れるツイートが増加し大勢を占め、科学的な情報発信は埋もれてしまっていた。

多くの免疫力向上方法

有名な免疫細胞にナチュラルキラー細胞がある。これを活性化する方法として

- ・笑う・・・ガン患者に漫才等で大笑いしてもらい、その前後で数値を測った所
大笑いの後は免疫機能が上がった。
- ・お化粧・・・避難女性にお化粧とハンドマッサージを施しストレスを下げる。
- ・食選び・・・広島、長崎の人で野菜や果物をしっかり食べている人の免疫機能が高かった。



—実験—

コップにヨウ素（イソジンうがい液）を水で薄めた液を入れ、その中にいくつか食品を浸し、その色の変化を見る。（酸化還元反応）

（左から・・・しいたけ、くるみ、にんにく、いか、とうがらし）

透明に近いものがより酸化還元反応が強く、抗酸化作用があるという事になる。

おわりに

この実験から、自分がこれからどのようなライフスタイルをとるかが重要になる。植物が活性酸素を消去する為にポリフェノールやビタミンを生成している様に、人間も生活の中で食品を選び、感謝していただく事が大切。結論として、今出回っている福島食品は問題ない。美味しい果物や野菜も沢山あるので、ぜひ選び取り、召し上がって頂きたい。

講演後も会員から次々質問が出て、活気のある時間でした。

小さい子供を育てている身として、何となく福島産の食品を避けていた自分。ネットで検索した福島食品の安全性の情報はネガティブなものが多く、そしてそれを鵜呑みにし

ていた事を反省いたしました。そして同時に福島の商品を購入して復興支援が出来る喜びも感じられた素晴らしい講演でした。一人でも多くの人を知り、広がり、そして真の復興に繋がることを心から祈っております。

閉会の挨拶久保宜子新副支部長

皆様、本日午前中は支部総会で熱心にご討議頂き、そして午後は講演会拝聴と長時間にわたり大変お疲れ様でした。新しい年度を迎え、また新たなスタートとなります。前年度の役員会の皆様ありがとうございました。今年度もどうぞ宜しくお願いいたします。

いよいよ来月には令和の新しい時代最初の全国総会が京都で開催され、100名以上の会員の皆様に全国からお迎えすることになりますので、私たち会員一同心を一つに頑張りましょう。只今、全国総会が無事に進行されますように、そしてご参加の皆様に新緑の美しい京都を十分に楽しんで頂けますようにと実行委員会では、準備を進めているところです。どうぞ皆様のご協力を宜しくお願いいたします。

閉会後は恒例のミニバザーを開催。会員が厳選した商品が並び、盛会となりました。

「全国総会を振り返って」

日時2019年6月22日（土）12:30～15:00

会場ホテル日航プリンセス京都「翡翠苑」参加者18名

佐賀会員の司会でスタートした会では、最初に高橋支部長から開会の挨拶がありました。総会での皆様のご協力への感謝の言葉と共に「総会に対する忌憚のないご意見を」とのことでした。

次に各自好みの飲み物を手に、中村会員の音頭で乾杯、食事が始まりました。

しばし美味しいお酒と中華料理を楽しみながら、総会での思い出話など語り合った後、各イベントの担当責任者からの報告に移りました。

最初に、実行委員長の大役を果たされた松田会員からは総会が成功した要因が具体的に示されました。松尾会員のご尽力でこのホテルを会場に確保できたこと。中川会員、勝目会員、亀田会員とのそれぞれのつながりで、村上副市長を来賓に、バイオリニストの森悠子氏を懇親会のゲストに、狂言師の茂山千三郎氏を総会の講師にと素晴らしいゲストを迎えられたこと。高橋会員のアンケートのまとめで成果の多いパネルディスカッションが持てたこと。事前の細やかな準備で研修旅行がスムーズに運んだこと等々。そして見えない所で働いて下さった方々の多大な努力で総会の成功が支えられていたことへの感謝を述べられました。



21日の懇親会については、名司会で会場を盛り上げて下さった中川会員（本日欠席のため代読）の「精一杯努めさせてもらいました。」との言葉が紹介されました。

その後、勝目会員が森悠子氏の感動的だった演奏とトークについて、「姉はどういう話がいいのか、どんな曲がいいのかと当日の朝まで悩み続けていたのを後で知りました。」とのエピソードを披露されました。

翌22日の総会では、高橋会員が全支部へのアンケートをもとに「支部活動について考える」というテーマで



のパネルディスカッションについて、改めてその経緯を話されました。23支部からのアンケートをまとめるのは大変だったけれど、アンケートを取ったおかげで支部長会議もスムーズに終われたし、パネルディスカッションも、もう少し踏み込んだ話になればさらに良かったけれど「今後の活動の第一歩になる話し合いだったと思います。」とまとめられました。私たち皆、改めてアンケートを立派にまとめて下さったご努力に賞賛の気持ちを強くしました。

最終日23日の研修旅行については、廣田会委員から詳細な決算報告書を配っての説明がありました。取るのが大変な迎賓館の団体予約が取れたこと。（これにはネットで情報を毎日確認された中村会員の大変な働きがありました。）木村会員のご紹介で良いバス会社を選べたこと。申し込みの人数が募集定員にピッタリ合致したこと。当日の天候に恵まれたこと。当初の予算通りに実施出来たこと等々。幸運にも恵まれて、無事に旅行を終えられたのを嬉しく思いますとの趣旨でした。

報告の最後、会計担当の松尾会員、久保会員からの会計報告を了承しました。

その後司会を島田に交代。出席者全員から総会の感想等を話していただきました。若い会員の方々からも、口々に総会に参加できて良かったとの声を聞かせてもらい、嬉しく思いました。「皆が気持ちを一つに力を合わせて、京都らしいおもてなしができて喜んでいきます。」（森悠子さんが話された）「ノートルダム寺院の火災のエピソードなどを何人もの友人に話しました。」等の感想を特に印象深く聞きました。

最後に久保副支部長から閉会の挨拶があり、このような例会を持た喜びの言葉で会を締めくくって下さいました。ホテルから「亥年」の絵皿をお土産にいただき、全員で集合写真を撮って解散しました。

総会については、深く掘り下げて反省点が語られなかったのが少し物足りなかったかもしれませんが、「ありがとう」と「楽しかった」の声が飛び交い、拍手と笑い声の絶えないとても楽しい例会になりました。



2019年度2回例会講演「世界の住民と共に道直し」

日時9月14日（土）13:30～16:00

会場ウイングス京都

講師木村亮氏（京都大学大学院工学研究科教授、NPO法人「道普請人」理事長）

出席者15名

松田栄子会員の司会で始まった例会では、高橋侑子支部長の挨拶に続き、阪田敦子会員から講師が紹介されました。



木村先生も、私と同じくカーフ（KAHF—Kyoto Association HostFamily京都ホストファミリー協会）の会員で、今まで2回たいへん興味深い講演をお聞きし、この会でも聴いていただきたいと思いご紹介しました。ご本*をありがとうございました。先生は、京大教授として地盤力学の講座をお持ちになり、認定NPO法人「道普請人」の理事長として、今までアフリカ、アジア、太平洋、中南米、至る所の道を直すために、力を尽くしてこられました。パンフレットをお読みいただくとよく分かります。

*全員に「アフリカに大学をつくったサムライたち」（発行所国際開発ジャーナル社、発売元丸善出版）というご本をいただきました。

I. 講演

〔テーマ〕世界の住民と共に道直し

〔講師〕木村亮（まこと）氏（京都大学大学院工学研究科教授）

プロフィール

1978年京都府立鴨沂高校卒業

1982年京都大学工学部土木学科卒業

1985年同院修士課程修了

京都大学工学部助手（1985）、助教授（1994）を経て

同国際融合想像センター教授（2006）、2010年より同工学研究科教授

専門分野：構造物の力学挙動、新工法・新技術開発、国際技術協力

認定NPO法人「道普請人」理事長（2007～）



私は京都大学の桂キャンパスで、工学研究科というところの教授をやっています。出身は、京都の東一条で、京大が小学校や中学校よりも近い場所にありました。小学校は第四錦林小学校で江崎玲於奈が出たところ、中学校は近衛中学、岸部一徳が出たところ、高校は、「鴨沂高校ぬるま湯温泉」と言われたゆったりした学校を出ました。そこから現役で京大に入り大きな目標を達成しました。家の裏が京大のユネスコのボックスだったので。大学院は、宇治のキャンパス、防災研究所へ行きました。自分では普通の建設会社に入り、海外で仕事をする予定でしたが、大学に残るよう勧められ、受けることになりました。勧めてくださった先生が、柴田徹先生で、そのご縁でカーフに入っています。

その後現在まで「世界の住民と道直し」ということで、貧困を削減するという大きな目標を掲げてNPOで活動しているのですが、あと若者の雇用創出ということに挑戦しています。そんな私を、嫁さんが、「あなたは立派なことをしている」と言ってくれていますので、無茶が許されています。2007年にNPOを作って、今年で12年目です。ランマー、土木用語ではタコというのですが、タコで土嚢袋をぽんぽんたたいて、その土嚢袋を強くして道に置いて、どろどろの道をちゃんと雨期でも走れるようにする、こういう活動をしています。私は、京大の先生としては20%、NPO法人として使っている労力が50%、あとの30%は何に使っているかということ、いろんな企業のアドバイザーですね。みんな私みたいな者ばかりだと大学がつぶれるかもしれません。学問的には、地盤工学という土のことを研究しているんです。地震がおこった時に、建物の基礎の支えが土の中に入っているのですが、それをどういう風に支えたらいいとか、どうやってトンネルを掘ったらいいかということの研究しております。私がいろいろアドバイスしたり、デザインした構造物が結構京都にも、大阪にもあるし、今やっている工事にもたくさんあります。



自転車で世界中を5万キロ走ったことも自慢しております。どんな所に行っても帰って来れます。この写真は、私よりずっと背の低いピグニー族の村に行った時のものです。工学部の先生がカメルーンへ行って、ピグニー族と一緒に写真を撮るということは、滅多にないと思います。今まで275回海外に出張しまして87回アフリカに行っております。アフリカ行きはたくさんみたいですが3割ちょっとですね。実は一週間前にも行って、コモロ諸島というところなんです。コモロ諸島はマダガスカルとモザンビークの間にあります。これがコモロ諸島です。車の渋滞がけっこう多いんですね。日本の中古車なんかも走っています。イスラム教です。観光資源がほとんどなく、300年前のハワイみたいな感じです。

最近力をいれている活動は7年半ほどで、日本の映画を一日に一本ずつ見続けるというものです。今までで3,003本になりました。だから映画の話ならずと出来ますよ。これはサハラ砂漠を自転車で縦断しているところ。大学院の2年生の時。2月頃と言えば修士論文を書いて審査を受けているときなのですが、こんなことをやっていたので、あえなく1年留年ということになりました。実は冒険家になってもおかしくなかったと思っ ています。これ、その頃の私の写真です。人は20歳ぐらいまではタテに伸びるんですが、それからは、横に伸びます。これ、アフリカで言うとメッチャうけるんですよ。アフリカ生まれもぐつと横に出てくるんで。私もこの写真の時に比べたら30キロ以上違うんで。人間の皮っていうのは不思議に伸びるんですね。

私、1993年にJICAとODAで作ったジョモ・ケニヤッタ大学に行ってきたさいと言われて、アフリカはいやだなという思いで、短期専門家として行ったんです。お手元にお配りしました「アフリカに大学をつくったサムライたち」、これはもともと私の師匠になる中川先生と岡山大学の岩崎先生が工学と農学で大学作りをしていた話を書いてあるのですが、私も1993年からずっとこの大学に関わって、アフリカのサバンナのところに、一から大学作りに関わったサムライ3号として157ページあたりにでてきます。それまで国際協力や、国際開発にまったく関心が無かったのですが、おもしろいと思いはじめました。これは、1994年の写真で、若者たち26名を、黒板の前で教えています。実際に行って若者たちに勉強を教えたり、研究者の卵を育てたりとかしています。最終的にはこの一人を京都大学まで連れてきて博士号をとらせて、今この若者が教鞭とっています。つまりそれくらい教育には時間がかかるということです。いかに時間がかかるかが、この「アフリカに大学をつくったサムライたち」の本の精神みたいなものだと思います。



私の家族に言わせれば、私はどこの国へどれだけ行ってもまったく平気、しんどい顔もせず、病気になったことも一切無しです。この写真を見てもらったら、自転車で行って砂の上に寝ています。これグランドホテルと言っています。地べたでも寝る。地べたで寝るとやばいのは、靴の中にサソリが入りこむんですね。朝、靴をはこうとしたとき、隠れていたサソリがびっくりして刺すときがあります。咬まれるとムカデや蜂にかまれたような感じで、ショック死することが多いので、刺されてもどうもないと思っておいた方がよいです。それより、サンダースネイクといって砂の中にもぐって活動するようなヘビに咬まれた方が怖い。咬まれたらそこから先は20分以内に切れと言われています。

次は私が食べた変なもの写真です。これはカエルの姿煮です。脚を持って食べるんです。これは毛虫のピリ辛炒めと呼んでいる乾きもので、酒の肴としては最高です。これは、猿の半年干しみたいなものです。田舎に行くと、今日は贅沢品ということで食べなけ

ればならんということになります。お客さんは頭を食べてくださいということなので、根性いります。

さて、土木の技術で林道を通るのを可能にする方法というのは、住民と共に道直しなんです。工学者としてどんなことが必要とされているかという、現地に行って探さないといけないのです。それをニーズの探索と言うのですが、教科書などから、えてして、アフリカやったらこんなものが必要だろうと考えたりするのですが、役に立たないことがあるわけです。具体的な解決策を呈示することが大切です。それが工学者としての役割であり生き甲斐です。ある時住民と一緒に道をきれいにしたら、「先生、チャリティいつまでするんですか？」と言った人がいるんです。じゃあ、住民がビジネスできるところまでもっていこうと考えました。日本で売れないからアフリカで売ってやろうという根性では、絶対成功しないですよ。やっぱり、アフリカの人にビジネスをやってもらうというモデルを作って持っていくとかしないとだめと思っています。

今日、覚えておいてほしいことがあるのですが、土木は、マスメディアの目の敵にされている、建築OK、土木ダメ、へんなことする人は土木作業員。悪者にされている。でも土木というのは、人々の暮らしを守り豊かにする。例えば、東京の鉄塔が倒れた時、ちゃんと建てるのは土木なんです。電気が送れる、水道が繋げる、ガスを繋ぐ、鉄道をちゃんとやってる、地滑りになった時道路がちゃんと通れるようにプロテクトしておく、全部土木です。建築は建物を建てるだけ、橋は誰が建てるかと、土木の人なんです。建物以外は全部土木なんです。

「人々の暮らしを守り豊かにする」これがSustainable Development Goalsです。それは、1番から17番まであります。1番は、貧困をなくそう、2番は、飢餓をなくそう、すべての人に健康と福祉をと、海の豊かさを守ろう、陸の豊かさを守ろう、あらゆる企業が目標とすべきような目標を設定しています。昔はMillennium Development Goalsがあって八つしかなかったんです。主にその目標というのは、途上国の目標だったんです。それが2015年には発展している国々にも目標となって全世界で目標たててやりましょうということになったんです。その一番、貧困をなくそう、これをNGOとしてやっていく、アフリカの人を幸せにしていくということで、この本にでてくる中川博次先生が難しい技術でなくて簡単な方法でアフリカの人を幸せにする方法を、考えないとだめだよとされている。本物の研究者は難しいことを、人に自分のやっていることを簡単に説明する、自分の母親に説明できるぐらいにならないとやっている研究はたいしたことないと言っています。

1993年からアフリカに行って活動しているんですが、アフリカで自分の研究成果を使ったことは一度もないです。スポーツカーを持っているんだけどアフリカの道で使えない、最新技術を持っていても無用の長物と判っていたんです。さて、なにをやったかというと農道整備です。畑と畑を結ぶ農道が雨期になるとムチャクチャになるのでそれをなんとか直すということを、ローコストでローテク、ローカル、つまり、安く、簡単な技術で、地域地域の問題として、あとレイバーベースとして機械を使うのではなくて人力で活動を始めました。

南アフリカは結構発展しているから、道路が全部足して35万キロぐらいあるのですが、他のアフリカ諸国はほとんど10万キロ以下です。日本にどれだけの道路があるかという、128万キロです。アメリカがいちばんたくさん道路があって、650万キロ、次がインド、それから中国といわれていますが、資料が古いので、もう中国がアメリカを抜いているかもしれません。650万キロと10万キロ、5万キロと言うのは雲泥の差があります。道路が少ないということと、80%以上の道路が未舗装なんです。このアフリカの国々は、20%が舗装で、あとの80%が未舗装、どういうことかということ舗装した幹線道路から脇に入ると全部未舗装、雨期になると泥溜めのようになりますね。救急車がはまったりして病院に行けなかったりするわけですね。農作物も腐らしてしまう、雨期に泥濘化して車輪が挟まってしまい通行不能になって、農作物を市場に運べなくなって換金できなくなってしまふ。それがひとつの貧困の原因になっているということが、現場に行って判る。つまりこれ、ニーズの探索ですよ。だからこの道路を雨が降った時でも通れるようにしたい、その住民の人がちょっと労力を払うことによつて直すことができるような簡単な技術を世界中に広める。Links to Marketをキャッチフレーズにしています。

NPOで成功するためには、経営的な感覚がないとむずかしいですね。ちゃんとボランティアさんに払ってあげるようにしなければならない。あとは、年代的に分散しているということです。事業が継続するということです。そしてやっていることがぶれない。コンセプトがはっきりしている、「自分たちの道は、自分たちで直す」という意識を持つ。つまり政府が来るのを待っているんじゃなくて、自分たちで、こういう風に穴ぼこのところは直しましょうということです。私、1960年生まれで、まだ60歳になっていないんですが、このまま後30年間ガンガンとやれば、ノーベル団体平和賞！京都大学の先生はノーベル賞もらわんとあかんので、団体として目指しています。

使うのは土嚢袋ね、みなさんは、洪水の時、土嚢を玄関の前に置いて水を止めたり、ブルーシートと共に屋根の上に置いて重しにしたりします。私の使い方は、この中に土を入れて木槌で20回ぐらいたたいてやると、これがコンクリートと同じくらいカチカチに強くなる。土嚢を世界に広めようと思っています。Do NOU Do now と言っています。土嚢という言葉の世界中に広めたいと思っています。20年後ぐらいのオックスフォード辞典にた

ぶん載っていると思いますよ。日本のへんな教授が開発した方法と言ってね。2層、布を引いて厚さ10センチですね、上から5センチで土をかぶせる、マラブというのは、アフリカの山綱みたいなもの、こうやってやると雨期でも通れます。たったこれだけ。これだったら袋代3メートル幅の道路を1メートル直すのに500円から1,000円ぐらいでできます。

まとめますと、忘れ去られた未舗装道路をどのように整備するか、開発途上国の農村部は、安価で現地で調達可能な材料で、人力で仕事ができる。持続的に通年、通行性を確保して雨期でも学校、病院、市場に行けるようにする、それが目標なんです。土囊などによる道路改修法を開発提案して住民自身による持続的な道路の維持管理システムを構築して自分たちの問題は自分たちで解決することができるということがだんだん判ってくれば次の発展への体力作りができるのではないかと。

単に道直しですが、道直しからエンパワーメントするので、他のこともできるのではないかと。道路を直すことができるのであれば、畑も広げることができるのではないかと、というふうになって、住民たちの生活のレベルが上がっていく。最終的には、こういう道直しをトレーニングした人たちに、建設会社を設立して発展させるようにしたいと思っています。

「道普請人」は世界27カ国に道を広げたんですね。メインで何カ国かやっているんですが、一番はじめに2005年の9月にパプアニューギニアではじめて成功しました。2007年の12月に法人を設立して、ケニア、パプアニューギニア、ミャンマー、ブルギアファツソ、ルアンダ、ウガンダ、に事務所を置いています。2007年に300万円で始めたNPOなんですけど倍々ゲームでどんどん増やしていったら2013年に1億円になって去年が1億7千万ぐらい、だいたい2億円ぐらい集めるようになりました。

何が重要かというところ、いろんな分野の人が参画しているということですね。それと、経営的な感覚を持っていないとだめです。それともうひとつは、やっていることがぶれないということです。道直し一本。そうすると、換金作物をくさらせずに市場に出荷できるようになって、収入が向上することで労働者を雇えるようになって、これまで仕事を手伝わせていた子どもたちを学校に通わせることができるようになって、今では、子どもたちを大学にも通わせるようになったと、ウガンダのモーゼスさんが言っていました。このモーゼスというあんちゃんはスラムにおった悪ですね。仕事も見つからず将来に希望も持てなかったけど道直しの研修に参加することがきっかけでスラムに住むユースグループの小さな建設会社を設立しました。作り方も教えてあげたんですが、今では国から直接受注するようになって、道直しが僕の人生を変えてくれたと言っているんです。こいつ俺がケニアに行ったら、空港で直立不動で待っていますからね。人生変えてますから。

お話し後は、活発な質問が続いて、予定の時間をオーバーするとても盛り上がった講演会でした。先生も「高校生、中学生、小学校1年生にでもそれなりの話で説明出来るので、そんな機会があったら、又呼んでください。」とおっしゃってくださいました。最後に久保宜子副支部長の挨拶で閉会しました。

II. 活動報告と連絡事項

高橋支部長より以下の報告がありました。

- 1) 賛助会員として、リヴォアール菜巳乃さんの入会
- 2) 本部から、外国にルーツのある子どもたちの日本語教育と進路指導を中学校でどのようにやっているかの調査依頼が来たので、京都市と宇治市の教育委員会の協力を得て、京都市では、開成中学校、春日丘中学校、宇治市では、南宇治中学校の3校へ訪問させていただき、その調査結果を本部へ送ったこと
- 3) 国内奨学生の募集を6月に行い、一般奨学生が応募4名、龍谷、橘、立命、京大からあり、社会福祉は、龍谷から1名、安井医学賞は京大から1名、合計6名の応募があったこと
- 4) 教育・ジェンダー・共生についての全国セミナー参加のお誘い



4. 国際奨学生を迎えて

2019年10月11日

高橋侑子

今年度JAUWの国際奨学生は、58名の応募者の中から、インドとミャンマーの2名の方が決まったと、先の総会や会報267号で報告されていました。

9月に入って、国際奨学委員長の岩村様からメールで、ミャンマーからの奨学生が京都大学農学研究科の神崎教授の指導を受けられることになり、奨学生の来日後の早い時期に、奨学金の一部をお渡しすることになっているので、その折に京都支部の会員にも参加していただきたいとの連絡がありました。私自身、国際奨学金については知らないことが多かったので、良い機会だと思いました。役員を中心に参加者を募ったところ、松尾、松田、中村、阪田さんに私の5名が参加することになりました。その後、岩村さんと何度かメールの交換をする中で、長年ミャンマーで自然保護活動をされている向後紀代美さん(前の国内奨学委員長)と同道なさること、又、せっかくの機会だから、京都支部会員とゆっくりお話しする機会となれば等の打ち合わせが出来ました。

ミャンマーからの奨学生IDDIDDさんは、10月11日早朝関空に到着、必要な手続きをされたのち、午後3時に京都大学で、岩村国際奨学委員長から直接奨学金を渡されることになっていました。しかし当日になって岩村さんが高熱で来られないことになり、奨学金は後日の振り込みになりましたが、向後さんと私たちは神崎研究室を予定通りお訪ねして、神崎先生、IDDIDDさんとお会いすることになりました。

IDDIDDさんは42歳、お子さんは両親に預けての来日で、さすがファイルドワークにかかわる研究者だけにエネルギッシュな方とお見受けしました。ミャンマーのタニンサリ地方の自然保護区におけるレッドリスト樹種の分布パターンを研究されているとのこと。神崎先生も森林科学の中で、ミャンマーとの関係を密にしながらのお仕事で、その国からの研究生は大歓迎のようで私たちの来室を待ってくださっていました。私たちも森林科学分野の研究室の様子を見学したり、その取り組みについて説明を受けたり、普段あまり関わっていない分野だけに大変興味深く、見聞を広めることが出来ました。地球温暖化の議論の中で、森林の重要性が取り上げられている昨今、研究の成果に期待したいところです。地元支部として、必要があれば、お手伝いさせていただくことや、来年初めの支部の新年会にはご招待させていただく旨お伝えしました。

神崎研究室をお訪ねする前、本部からの向後さんと昼食を共にし、交流を図りました。向後さんはご自身の自然保護活動の資料も持参され、和やかな交流の時間となりました。



「京都鉄道博物館」見学

日時11月12日（火）11:00～15:30会場京都鉄道博物館

参加者13名

梅小路公園内、木造の旧二条駅舎を横目に、三々五々モダンな鉄道博物館のエントランスホールに集合。



ガイドをして下さる吉添課長さんの案内でガイドツアースタート。入り口を入れて、大きな屋根のある屋外プロムナードへ。日本初の0型新幹線やC62型蒸気機関車が並んで、巨大な駅のプラットフォームのようでした。



本館に足を踏み入れると、先ず500系新幹線が目に飛び込んできました。鉄道黎明期から現代までの様々な車両が並ぶ様子はまさに壮観。口々に「懐かしい！」と声が上がリ、次々とガイドさんに質問攻めです。車両横に記されたナンバーの説明など、一つ一つの質問にとっても丁寧に分かりやすく答えて下さいました。奥に進むと、向かって左側が鉄道の仕組み、右側が鉄道の歩みの展示です。地下に案内されて、真下から車両を眺める珍しい体験もしました。





2階では90周年を記念して集められたヘッドマーク（列車の愛称）の企画展を見学。懐かしい列車の思い出話が尽きませんでした。次に京の四季をバックに実物の約80/1の精巧な模型が走る「鉄道ジオラマ」を15分間楽しんだ後屋外へ移動。



最後に見学した蒸気機関車の「扇型車庫」は、迫力満点。有名なD51や皇室のお召し列車など黒光りする蒸気機関車全20両が並ぶ様子は圧巻でした。SL乗り場から聞こえる警笛の音を聞きながら、集合写真をパチリ。その後大半のメンバーが10分間の「SLスチーム号」乗車体験を楽しみました。



広い庭園に囲まれた梅小路公園「緑の館」内「京野菜レストラン」で遅めのランチをゆっくり頂いた後解散。天候にも、見学場所にも、ガイドさんにも恵まれて、興味深く楽しい半日を過ごすことができました。

6. 2020年新春の集い

2020年1月25日

日時2020年1月25日〔土〕12:00～15:30

会場リーガロイヤルホテル1F「ラシゴーニュ」

出席20名

爽やかに晴れ渡った日、久保副支部長の司会進行のもと、高橋支部長の久しぶりにお目にかかる会員や、ヴァイオリニストの高木和宏さんを迎える喜びの挨拶と共に、新春の集いが始まりました。新しく会員に加わってくださるとい、竹内会員のご友人、森川典子さん、木村会員の年長の娘さんも加わりいっそう明るい雰囲気の中での集いでした。高橋支部長と久保副支部長が用意して下さった福引きに、佐賀会員のお持ちくださったコーヒーも景品に加わり、あとでのお楽しみとなりました。

ヴァイオリン演奏

先ず勝目会員から本日の演奏者高木和弘さんの紹介がありました。高木さんは北野高校を出られた後、勉学の道に進もうかヴァイオリンに進もうか悩んでいたとき、京都音楽アカデミーで勝目会員の姉君である森悠子さんに出会われ、ヴァイオリンの道に進まれることを決心されたそうです。奇しくも、パガニーニと10月27日の誕生日が同じということで、その申し子のように超絶技巧での演奏を聴かせてくださるといことで会員の期待が盛り上がりました。

高木和弘さんのプロフィール

6歳からヴァイオリンを始める。1991年、大阪府立北野高等学校を卒業後、第2回京都フランス音楽アカデミーにてドウカンに師事。リヨン国立高等音楽院に入学し、森悠子、エドワード・ウルフソンに師事。南メソヂスト大学でエドワード・シュミーダに師事。

2000年9月、文化庁派遣芸術家在外研修員として、シカゴ芸術大学に留学。2001年-2002年度にシカゴ・シビック・オーケストラのコンサートマスター、2002年11月-2006年2月、ドイツ・ヴュルテンベルク・フィルハーモニー管弦楽団の第1コンサートマスターを務める。

2007-2012年、東京交響楽団コンサートマスターを務め、現在は、山形交響楽団ソロ・コンサートマスター、長岡京室内アンサンブル、いずみシンフォニエッタ大阪、Eusia弦楽四重奏団の各メンバーである。また、DJ YOKU率いる「A HUNDRED BIRDS」、ロッテルダム・タンゴバンド「タンゲロス・ポラレス・コン・フェルヴェルデ」のメンバーでもある。

続いて楽しいコメントを交えながら、パガニーニ作曲のカプリスより7番、24番、パイジェッロのアリア「Nel cor piu」が演奏され、その透明で力強い演奏に全員が酔いしれました。



会食

廣田会員から、子年生まれということで乾杯のお役を受けたこと、京都支部が若返って行くことを祈念しますとのスピーチがあり、支部の発展を祈っての乾杯となりました。日本酒「瀟」の乾杯で始まり、ワインも配られ、おいしく、ほどよい量のコース料理で、満足の会食でした。サービスも心がこもっていて、久保副支部長のご紹介で幸運でした。

会食の間、各テーブルから一人ずつ、お話しすることになりました。



佐賀会員からは、近頃は離婚訴訟において子どもが小さいときでも夫が親権を求めることが多かったこと、イソ弁（「居候弁護士」＝アソシエイト弁護士）だった男性が、子どもが病気でと言って帰る時代になってきたことなどのお話がありました。続いて永田会員からは、小林聖心女子学院での3年間の教師生活では、松下幸之助の孫娘や大会社の社長の娘など裕福な家庭の生徒が多く、別荘に招かれたりもして、一般家庭とは違う別世界を経験したとの思い出が語られました。松尾会員からは、聖母女学院に勤めた頃、京阪の聖母専用車の見回りの担当を良く忘れて「すみません」ではなく「ごめんくださいませ」



とあやまらなくてはならなかったエピソードや全国総会会計としての思い出などを興味深くお聞きしました。

その後、全員に当たる福引きがあり、かわいい靴下などが当たり楽しいひとときでした。



高橋支部長から報告

大学女性協会の国際奨学生として今、京大農学部神崎研究室で研究しておられるIddiddさんが参加予定だったけれど、痛めた眼の診察日に重なり、来れなかったこと。

京都から社会福祉奨学生になられた龍谷大学3回生の相葉咲希さんは、車椅子で乗り継ぎキャンパスまで通っておられ、障害者も自然にみんなの中に入って生活できるような地域社会づくりをめざして研究されていること。

その相葉さんが、京王プラザホテル新春の集いの奨学金贈呈式に参加されたこと。新春の集いの様子、乾杯の音頭をとらせていただいたことなどの説明がありました。最後に久代佐智子会員の御著書「旅人」の出版をお祝いする会を開きませんかとの提案で閉会となりました。

7. 会員出版祝賀会

2020年2月22日

日時2020年2月22日（土）12:00~14:00

会場烏丸京都ホテル「入舟」

出席13名

昨年12月、久代佐智子会員が御著書「旅人」を私たち会員にお送り下さいました。会員の中から「素晴らしい作品に感動しました。」「先生をお招きしてお話を聞きたい！」等の声上がり、久代先生を囲んで出版のお祝いのお会を開くことになりました。当日は、ホテルの和食処で食事をしながらの充実した楽しい歓談の一時でした。



最初に高橋支部長から「今日は先生のご本を中心に、ごゆっくりと歓談の時にして頂ければと思います。」との挨拶がありました。続いて、著者の久代会員が「この本が形になります前には、実は、会員の田中ひな子さん、中村泰子さんに本当にお世話になりました。言葉についての貴重なご意見とか、京都弁の指南も頂き、お礼を申し上げたいと思います。」「あの当時（第2次大戦中から戦後の混乱期）の大変だったのと今の大変なのは、どこが似ていて、どこが違うのかを考えながら執筆しました。」等と述べられました。出席者からは、読後の感想と共に次々と質問が続き、先生がそれに答えて下さる中で、この本の成り立ちや著書に込められた思いが私たちにもよりはっきりと伝わってきました。最初に書こうと思いついたのは70年、その後現在は老々介護の中で、少しずつ時間を見つけて書き継いでこられたこと。出版に際しては、形にすることだけを考えていたが、2、3日前にちらっと若い人に読んでもらえるように書店の片隅に置かせて欲しいとの思いが頭に浮かんだこと等々。

途中、中村会員の乾杯の音頭で食事が始まりました。「うれしい出版を完成されて、おめでとうございます。戦後70年が経って、（2年先輩の）先生の戦争中の過ごされ方、戦後の教育改革の過程等いろいろな記述を読みながら、自分の人生が懐かしく、勉強させてもらいました。このご本は、若い方が今の恵まれた状況に安住しないで、先に進むきっかけになると思います。今日は素晴らしい先輩をお迎え出来て良かったです。乾杯！」食事の間も、先生が召し上がる暇が無い位、会員からの質問で話が盛り上がりました。表紙カバーの折り返しの英文‘My salad days, When I was green in judgment…’（そのころ、万里子はレタスの様に青く、思慮分別が未熟であった「万里子の航路」冒頭）は、シェークスピア「アントニーとクレオパトラ」のクレオパトラの言葉からの引用で、カバーの緑はレタスの色。タイトルの「旅人」は最初から決めていたこと。非常に遠い旅‘万

里’から作中の主人公の名前を‘万里子’と名付けたこと。日本語の文体は、19世紀初めから20世紀にかけての英国の作家の英語の文体を真似て、直接話法と間接話法をミックスする手法を取り入れたこと。若い人が余り抵抗無しに読める様に意を尽くしたこと等々。興味深い話が尽きませんでした。

最後にプレゼントのお花と著書を手笑顔の先生を囲んで、記念写真を撮り解散しました。このご本を是非書店に置ける形で再出版して、多くの人々特に若者に読んでほしいというのが出席者一同の願いです。



8. 2019年度第4回例会

2020年3月14日

今年度社会福祉奨学生に選ばれた相場咲希さんの講演を予定していましたが、コロナ禍で残念ながら中止しました。

9. 国際奨学生送別会

2020年3月20日

IDD さんミャンマーでのご活躍を！

当協会の国際奨学生として、京都大学・農学研究科・神崎研究室で研究を進められることになった、IDD さんを昨年 10 月京都にお迎えしました。1 月には京都支部の新年会にご招待したのですが、ご本人の体調の為、ご一緒することが出来ませんでした。

その後、3 月に東京で研究成果の発表、3 月末に帰国の予定でした。ところが、本年 2 月ごろから日本に広がり始めた新型コロナの感染拡大によって、成果の発表会は中止、論文のみの提出となりました。ミャンマーへの帰国も二転三転して、早まり急遽、3 月 20 日深夜便の出発となりました。

神崎先生と連絡を取り、出発当日のお昼にお別れ会が出来ることになりました。神崎先生、IDD さん、ミャンマーからの留学生、京都支部からは支部長、松尾会計、佐賀国際委員、松田書記の 4 人で計 7 人の参加でした。IDD さんに Final Report、研究内容について説明をしていただきました。お話の内容の理解は容易ではありませんでしたが、これから現地の森林の保護管理に大いに役立っていくことと思われました。

約半年、日本で過ごされた IDD さんは、前にお会いしたときよりは随分落ち着いて、お美しく見え、お話によりますと本国では大学の仕事などお忙しかったのに、京都では、研究に専念できたことをとても喜んでいらっしゃいました。きっと充実した研究生活を送られたことと大変嬉しく思いました。

京都支部長 高橋侑子